

千年の森便り No.193

2019.08. 23

ちば千年の森をつくる会

<http://toyofusajima.html.xdomain.jp/>

代表 坂本文雄 編集 真鍋昌義

sennennomori@hotmail.co.jp

活動の記録

8月18日(日) 晴

8月18日は夏のきのこ観察をテーマにした環境学習の公開行事でした。きのこは秋だけ発生するものではなく、年間を通して色々な種類が入れ替わり発生しています。夏には夏のきのこありと言う訳でこの時期に行事を設定したのですが、雨の降り具合で当たり外れの差が大きい危険な賭けでした。7月の長雨の反動なのか8月に入ってから猛暑続きで雨は殆どありませんでしたから、結果は大外れで遠来のお客様の期待を裏切ってしまいました。主催者としては針の筵に座った気分でしたが、参加の皆さんからの自然相手だから仕方が無いと理解ある言葉を頂いて救われました。採集出来た種類が少なく、吹春先生の同定会も話題が尽きたので早めに切り上げて予定より1時間早く帰路につきました。また当日は異常な蒸し暑さで、ヤマビルさえも活動出来なかったのか全く姿を見ませんでした。参加者は会員12名、講師2名、一般参加27名、合計41名でした。(坂本)



○バス車内の様子

今回の環境学習を目的にした公開行事に対する環境財団からの助成金によりバスが出せました。バスのメリットは遠隔地から参加の方へ交通の利便性提供に加え、講師の吹春先生にも同乗して頂いて、車中で講座が聞ける事です。きのこ観察に馴染みの無い初心者もいた事から、往路では基本的な内容を平易に話していただきました。バスを降りる時、「面白かったです。為になりました。」と声掛けしてくれた人がいました。復路ではマイクを回して、自由に質問してもらったところ、多岐にわたる話題が出ました。松ヶ丘インターの手前から渋滞が始まりましたが、先生のお話が興味深かったので、渋滞もむしろ歓迎でした。きのこは不作でも有意義な時間が過ごせたと思います。毎度の事ながら先生には何から何までお世話になり、感謝、感謝です。バス利用者は26名(講師2名、会員4名含む)でした。(坂本)

○きのこ観察ホテイ岬コース

吹春先生ご案内のコースは実物が生えている状態を見ながら解説してもらえるので、何時も人だかりが絶えません。しかし、千年広場周辺の平坦地では林内は乾燥しきっていて目につくのはカワラタケ等の固いきのこばかりで、なかなか先生の出番がありません。ホテイ岬方面なら多少湿り気があるかも知れないと方向転換。何か無いかと下ばかり見て。うろついているうちに先生を見失ってしまいました。誰かが土に半分埋もれた丸いものを発見。これは何だと期待を込めて丁寧に掘り上げたら、漂着して打ち上げられたテニスボールだったと言う笑い話の一幕もあり、悪戦苦闘のきのこ探しでしたが、最後にハイカグラテングタケを



最後にハイカグラテングタケを発見

発見して皆でじっくり観察でき、大満足でした。本来ハイカグラテングタケは大型で目立つものですが、今回のものは恐らく水分不足で正常に育てなかったものでしょう。落ち葉に埋もれたかさの一部が顔を覗かせていただけで、ちょっと見にはとてもきのこと思えない姿でした。それを見つけて「これは何？」と声をかけてくれた方の眼力に脱帽です。(坂本)

〇きのご観察健脚コース

広場をスタートして西の禁断の岬方向を目指すルートでご案内しました。森が乾燥ぎみだったので、南西側の入り江に下り湖沿いに西に進み、ヒメコマツの植栽地手前で尾根に上り、尾根沿いに広場に戻ってきました。



ウラグロニガイグチ見つけ

発見したものは、広場を出てすぐのコナラの幹にカブトムシ?と思ったらオオゴキブリ! フクロウの羽根2枚、小型の動物の骨格(たぶん今年生まれたニホンジカ)、トサノクロムヨウラン or クロムヨウラン、きのこはウラグロニガイグチ、テングツルタケ、硬いきのご数種と非常に少ない状況でした。(福島)

〇吹春講師解説要旨



皆さんの休憩中に試料を丁寧に分類し



少ないきのこを前に説明は丁寧に



20年使っている資料に沿って説明します。資料は孢子紋の色で区分したものです。孢子紋による区分は、最近のDNAの分類にも概ね対応しています。

孢子紋が白い仲間にはベニタケ属やチチタケ属があります。ベニタケやチチタケはもろいので縦に裂けず歯ごたえがありません。これは、きのこの組織に丸い細胞がたくさん入っているためです。ドングリの森はベニタケが優占しており、森にとって大事なきのこです。ただ、名前がつかないものが多いです。ベニタケ属は *Russula* (ルスラ) と呼ぶとカッコいい。千葉県で代表的なのはハツタケです。チチタケ属は *Lactarius* (ラクタリウス)、チチタケは栃木県では世界最高のきのこことされています。この仲間では、ニセクロハツという致命的なものもあります。これらは外生菌根菌で、ドングリの木、シラカバ、マツなどと共生しています。

テングタケの仲間も外生菌根菌です。ツボとツバがあるもの(テングタケ型)、ツボだけあるもの(ツルタケ型)があります。ドクツルタケのツボは外皮膜です。コシロオニタケとしたのは内皮膜が綿状になっているため、綿状のものはコシロオニタケが多いです。ハイカグラテングタケは、今回採れた中で唯一食べられるきのこです。山溪の図鑑に写真が載っていましたが、その後中国で記載され *アマニタ・シネンシス* という学名がついてしまいました。全体を覆う粉状のものは、外皮膜が壊れやすくて粉状になったものです。テングタケの仲間は、傘に溝線(条線)があるものとないものに大きく分かります。溝線があるものにはタマゴタケがあります。このドクツルタケは溝線が見えません。テングツルタケはツボになりません。

孢子紋がピンク~肉色のグループには、イッポンシメジの仲間が入ります。千葉で代表的なものはウラベニホテイシメジです。孢子紋が褐色のものはアセタケ属があります。毒きのこが多く、食べると汗が出るということでついた名前です。

イグチの仲間は、傘の裏が穴々（網の目状）になっています。ポルチーニもこの仲間です。キダタケのように穴にならないものもあります。このウラグロニガイグチは、食べられるらしいですがお腹を壊す人もいます。食べる人によるものか、発生している場所によるものかはわかりません。オニイグチは、図鑑には3種ありますがもっと分類されそうです。

硬いきのこについては少し無理やり名前を付けてみました。イボタケの仲間は、傘の裏がイボイボになっています。乾くと邪悪な臭い？がします。ヒメツチグリの仲間は、押すと胞子が飛び出します。

ここまでは担子菌類でしたが、こちらは子囊菌類です。トリュフもこの仲間です。ビョウタケの仲間は、小さいですがこれが普通の大きさです。子囊菌の菌核は、菌が木材の表面を黒く覆って硬くし、他の菌が入ってこないようにしたものです。

今日は商品が少ない商店主のようですがご理解いただけただけでしょうか。

(福島、画像は栗山、佐藤總子さん)

ハイカグラテングタケのこと (寄稿 吹春俊光様)

今回は、調査史上まれにみるきのこ不作だったそうですが、大きなハイカグラテングタケが採れました(採った方、ありがとうございます!). 本種が未記載種として「日本のきのこ」(山と溪谷社)に掲載されたのは1988年です。その後、ずっと未記載のままでしたが、テングタケ類をドイツで勉強され、中国にもどったYang, ZLさんが中国産のものを *Amanita sinensis* として記載しました(1997)。その後、京都大学の大学院生だった小田貴志さんがネパールに産することを報告しました(Oda et al. 2000)。小田さんは、千葉県から



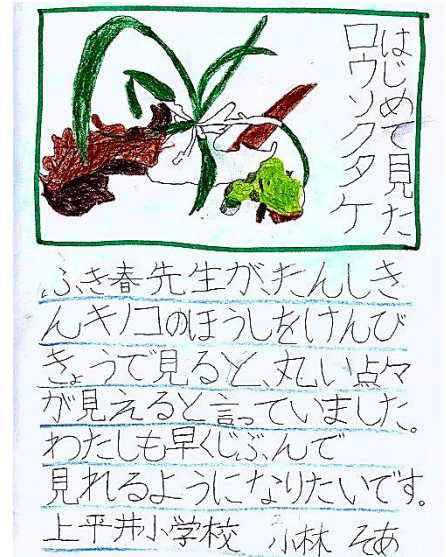
ハイカグラテングタケ 2018年8月豊英島

シロオビテングタケ(東大演習林)やアオミドリタマゴテングタケ(千葉市泉自然公園)を新種記載した方です。その後、テングタケ類の研究は、中国で、ものすごく進展し、現在の中国のテングタケのモノグラフをみると(Cui et al., 2018)、ハイカグラテングタケは、ネパール、タイ、中国、韓国、日本から知られているようです。照葉樹林の分布域と重なる「東南アジア要素(本郷)」ですね。いつも申し上げるように、千年の森の自然は、中国をへてネパールにつながっていることを、きのこが教えてくれるのです。ちなみに本種は雲南で食用きのことして販売されているそうですが、「neurophychiatric toxin」を含む可能性がある(Cui et al., 2018)と書いてありました。

(参考) ・Cui, YY et al. (2018) The family Amanitaceae: molecular phylogeny, higher-rank taxonomy and the species in China. *Fungal Diversity* 91: 5-230. ・Oda, T., et al. (2000) *Amanita sinensis*, new to Japan and Nepal. *Mycoscience* 41: 403-405. ・Yang ZL (1997) Die *Amanita*-Arten von Sudwestchina. *Bibliotheca Mycologica* 170: 1-240

○はじめて見たロウソクタケ

(上平井小学校 2年 小林蒼空そあ)



○落葉の陰にハイカグラテングタケ発見！

一般参加で 2 度目になる観察会に参加させていただきました。昨年はマムシが出たので緊張をしながら落ちている枝で地面を探りながら歩きました。先日の 10 号台風の影響か昨年の時より落ち葉に湿り気がなく地面も乾燥していてカチカチだったので今回はきのこに会えないのでは、と諦めムードが漂ってきます。それでも蜘蛛の巣と闘いながらコナラ林地区へ進みホテイチク林地区へと進み、普段は水の底になっている砂地に（今回は水の量を減らしていたそうです。）出ました。そこで、千年の森をつくる会の方に鹿の足跡を教えてくださいました。（鹿が夜泳いで渡ってくるそうです。）この時とても爽やかな風に吹かれ癒されました。また、川には、しっぽの付け根が青い小さな魚がたくさん泳いでいます。対岸は崖になっていてその上をトンビが羽を広げ風に乗って優雅に飛んでいるさまを見てしばし休憩を取りました。休憩後広場へ戻ることにし、歩いていたら木と木の間に落ち葉に混じり木が黒くカビたような物を枝でつついてみたらキノコのカサのようだったので近くにいた方に声をかけると、キノコだということで採っていただきました。「ハイカグラテングタケ！」諦めていたのに大きな収穫を得られました。（滝口永利子さん、画像は山川江里子さん）



ハイカグラテングタケ発見

○2019-8-18 きのこの観察会のキノコ

科名	種名
ホウライタケ科	ホウライタケの仲間
ガマノホタケ科	ヒメカバイロタケ
テングタケ科	テングツルタケ・ドクツルタケ・ハイカグラテングタケ・コシロオニタケ
ウラベニガサ科	ウラベニガサ
アセタケ科	アセタケ属種
イグチ科	キヒダタケ・ウラグロニガイグチ・オニイグチ属種
ベニタケ科	ベニタケ属種
ヒメツチグリ科	ヒメツチグリ属種
イボタケ科	ボタンイボタケ、ボタンイボタケの仲間
タマショレイタケ科	アミスギタケ・ウズラタケ・ツヤウチワタケ・ヒイロタケ・カワラタケ
所属科未定	ハカワラタケ
タバコウロコタケ科	ネンドタケ・ネンドタケモドキ

ヒメツチグリ科	ヒメツチグリ
キクラゲ科	アラゲキクラゲ
ロウタケ科	ロウタケ
所属科未定	ビョウタケの仲間
クロサイワイタケ科	クロコブタケ



テングツルタケ



ハイカグラテングタケ



ヒイロタケ

今年の夏のきのこの観察会は、稀に見る不成績でした。原因は長く続いた、晴天と乾燥のため、地下の菌糸マットが、キノコの生える環境に無かったため為と思われます。（松田）

〇きのこハンター見習い、獲物ゼロ。「ぶっちょ」もなし。こんなときもあるよね。

今回はどんなキノコをゲットできるかしら？と前々から期待していた観察会。確かに最近、暑いばかりで雨が降らない。バスの中でも、坂本会長や講師の吹春先生が今日はキノコがない、ないと連呼。

でも、そうは言っても少しはあるだろう。それに先月あった「ぶっちょ」みたいなキノコがどうなったか確認せねばと、やる気満々、島に上陸しました。



急斜面を歩いて健脚コース



少ないきのこを熱心に観察



森も湖も干上がって



7月にあった「ぶっちょ」もない

班分けでは、福島さんの健脚コースに参加。禁断の岬に続く道を外れて斜面を下り、湖面に近いところを進みました。

あれ～やっぱり？キノコを探し始めてすぐに懸念が現実のものとなり、ちょっと落胆。それなら「ぶっちょ」を見に行こうと、単独でヒメコマツ植樹地を上に登りましたが、跡形もない・・・う～ん。

もう、十中八九、キノコはない。でも、もしかしたら・・・確かめねばならぬ。福島隊を離れ、キノコを探しながらホテイ岬の方へ向かう途中で吹春先生ご夫妻に会いました。

「乾いたものしかありませんね。いろいろがないです。」先生が探してないのなら、自分が探せないのは仕方ないこと。ようやく納得がいきました。ホテイ岬は湖水が引いて湖面の下にあった枯木が露出。ちょっとだけ、昔にいった北海道のトドワラのような風景で印象的。シラカバではありませんが。

広場へ戻る途中で、冬虫夏草なら見つかるかもと急な閃き。木に登って果てた蟬がないかどうか、地面でなく木の幹を見ながら歩きました。結局、獲物はゼロでしたが、やるべきことはやったとの思い。

坂本会長は帰り路、バスの中でも申し訳ない旨を繰り返されましたが、魚釣りでも釣果なしはあること。「菌果なし」も自然相手なので。秋のきのこの観察会でリベンジするのみです！

（FB ちば里山_People の投稿から 友塚）

○昆虫観察記録

蒸し暑く、何もしなくても汗がダラダラ。こんな暑い日には虫の姿はあまり見られません。ツクツクボウシの音が森に響き、夏も本番から終盤へ。豊英湖の水位は低く、干上がった地面上空を、ウスバキトンボが群舞していました。南方系のトンボなので暑いのは平気なようです。オオヤマトンボの羽化殻が水辺の木についていました。久我さんの奥様が手招きするので行ってみると、クモの網にかかったセミをムモンホソアシナガバチが襲っていました。恐らくセミを肉団子にして巣に運ぶのでしょう。シカ除けネットに6cmほどの大きな繭がついているのを秋元さんが教えてくれました。触るとチクチクと痛い！老眼の目には気づきませんでした。が、写真で見ると黒い「毒針毛」が沢山ついており、これが刺さったようです。他にも参加者の皆さまから、ヤブキリ等たくさんの虫情報をいただきました。沢山の目で虫を探していただけるとは有難いことです。ありがとうございました。

※何の繭か気になり、持ち帰り羽化させたところ、ツガカレハという蛾だとわかりました。幼虫、繭には毒がありますが、成虫にはありません。



オオヤマトンボの抜け殻



ムモンホソアシナガバチ



ヤブキリ



ツガカレハの繭

(他に観察された昆虫) イシノミの一種、ヤブヤンマ、コシアキトンボ、シオカラトンボ、クチキコオロギ、トビナナフシ幼虫、オオゴキブリ、オオカマキリ、アカサシガメ幼虫、ア オバハゴロモ、ニイニイゼミ、アブラゼミ、ヒグラシ、オオヒラタシデムシ、オオセンチコガネ、センチコガネ、カナブン、アオハナムグリ、カブトムシ、ヨツボシケシキスイ、ウシアブの一種、モンキアシナガヤセバエ、ヒメキンイシアブ、スキバツリアブ、ジャコウアゲハ、キタキチョウ、ムラサキシジミ、コジャノメ、コムスジ、ヒメジャノメ、サトキマダラヒカゲ、ヒメウラナミジャノメ、フタテンオエダシャク、オスグロトモエ、ホソバソトグロキノメイガ、キボシノメイガ、ゴマフリドクガ幼虫、トゲアリ、ムネアカオオアリ、ヤマトアシナガバチ、スジボソコシフトハナバチ、ミカドジガバチ (田島)

○ツチアケビ

千年広場南に5月芽を出した1本は病変で枯れ、ヒメコマツ柵内の7本中4本が病変で枯れ、残る3本に果実15個をつけていました。今年初めて吊り橋終点に発芽して開花した1本はシカの食害で全滅、結局ヒメコマツ柵内の3本だけが健在でした。

今春、千年広場周辺に大量のナラタケが発生し、ナラタケに栄養依存するツチアケビが勢いづくかとの期待も空しく、衰退傾向を続けています。(真鍋)



ヒメコマツ柵内に残る3本

〇クロムヨウラン or トサノクロムヨウラン

豊英島にはクロムヨウランが自生しているとされてきましたが、昨年、神戸大の末次先生の発表で、「クロムヨウランは開花せず、閉鎖花のまま結実し、開花するのはトサノクロムヨウラン」ということになり、豊英島にクロムヨウランも自生するのか、全てトサノクロムヨウランかという疑問が出てきました。

昨夏から栗山さんを中心に開花する個体と、開花しない個体の観察調査記録を継続実施し、今年も7月27日と8月4日の2回、秋元、栗山、真鍋で調査を行いました。

8月4日までの調査で

- (1) 開花しトサノクロムヨウランと思われる個体又は株の集合が13か所
- (2) 未開花のまま実をつけている個体又は株の集合が7か所
- (3) 未開花の個体又は株の集合が40か所確認されている。



開花するトサノクロムヨウラン



不明種

以上のうち(1)は明らかにトサノクロムヨウランであるが、(2)(3)は開花するかしらないか不明のため、クロムヨウランかトサノクロムヨウランか種名が分らず、インターバル撮影により開花するかどうかを確認する必要がある。来夏必要な準備を整えて、適期にインターバル撮影調査を行い、長期間開花しない個体の試料を採取して、解剖学的な同定を専門家に依頼します。(真鍋)

お知らせ

〇9月の活動日 9月16日(月・祝日) 清和自然休養村管理センター(直売所) 駐車場9時30分集合。

シカ個体数調査、環境整備(観察路、ベンチ)、植物・野鳥・昆虫調査、ギャップ林植生調査など。

〇10月の活動日 10月20日(日) 清和県民の森駐車場9時30分集合。

秋のきのこ観察会(吹春講師)、植物・野鳥・昆虫調査など。